



●白楽天ってどんな人？ ～彼の生まれ育った時代背景～

「白居易」、字(あざな、昔中国で成人男子と女子が実名以外につけた名)は「楽天」
名の「居易」は、『中庸』の「君子は易に居りて以て命を俟つ」から名付けられた。

現存する文集は71巻、詩と文の総数は約3800首と唐代の詩人の中で最多を誇り、平易通俗の詩風といわれる。

西暦772年、河南省新鄭県に生まれる。杜甫が59歳で没した二年後にあたり、盛唐の主な詩人たちの二世代ほど後になる。祖父、父ともに地方官僚という家系に生まれ、決して良い家柄というわけではなかった。盛唐の時代に生まれていたら、おそらく生涯芽が出ることはなかっただろう。しかし彼の育った時代は、唐王朝を根底から揺るがした「安祿山・史思明の乱」(西暦755～763)以後の政治改革により、才能一本で高い地位に上ることができるように世の中が変わっていた。

一方で、「安祿山・史思明の乱」の直接の影響がまだ消えやらない時代でもあり、当時の朝廷ではそれまでの貴族主体の体制が崩れ、中級地主層を中心に新興官僚がしたいに勢力を伸ばし、貴族出身の旧官僚たちとの勢力争いがおこっていた。中央では宦官が横暴をきわめ、地方の軍閥も自己の勢力拡大にのみ熱中し、搾取に耐えかねた農民たちは郷里を捨て、僧侶や道士となって世をのがれるものや、盗賊になるものも少なくなかった。

白楽天は、このような混乱した社会の中で成長し、彼の人生行路と詩風に、次の二つの相異なる影響を与えた。一つは特に若いころ、混乱した社会を正し、救済しようという抱負をはぐくんだ。もう一つは、新旧官僚層や宦官らが繰り返す政争の愚かさに絶望し、老荘思想や仏教思想に傾倒して世俗を超越しようとする態度を導いた。

●白楽天の生涯

西暦772年正月二十日、父の季庚(44歳)と母陳氏(18歳)の間に生まれる。(両親めっちゃ歳の差！！)
生後6～7ヶ月で屏風に書かれた二文字の漢字を識別し、5歳で初めて作詞を学ぶという神童ぶりを発揮。

15歳より本格的に作詩を開始。同じくそのころから、科挙(官吏登用試験)の中でも特に難関で、それだけに出世の糸口とされる進士科の試験に向けて猛烈な受験勉強を始める。あまりに壮絶な苦労のため、身体はやせ、頭には早くも白髪が混じり、歯や目も衰えてしまったという。また、十代の頃は、兵乱と父の転任にともない、各地を転々とする。生活も決して楽ではなかった。受験勉強中の23歳の時に父を失い、一家はさらなる困窮にあえぐ。

28歳の時に郷試(地方試験)に及第、翌年には最初の挑戦で、難関の進士科に及第することができた。
しかも成績四番で17名の及第者中最年少という晴れがましい門出であった。

その後さらに上級試験を突破し、35歳で高級官僚のコースを歩み始め、37歳で結婚、38歳で娘が生まれる。
しかし40歳の時、人生の中で初めての挫折を味わう。娘、そして母を失い、郷里の下邳(長安の東北)に帰って三年の喪に服する。また、当時の政治情勢も、白楽天とは相容れない勢力者の体制下にあり、それゆえに郷里での日々も、憂鬱で孤独な時間だった。

44歳、ついに些細な事で左遷される。武元衡暗殺をめぐり、上書(暗殺者を捕まえるだけではなく、その暗殺者を裏で操っている存在を明らかにすべきだという内容)を送ったことが越権行為とみなされたのだ。また、それまでに多く発表していた当時の政治を風刺する詩に対し、権力者たちの間で憎しみの感情がおこっていたことも大きな理由であった。

左遷は彼にとって深刻な打撃となり、その後の人生観を左右するほどでもあった。努めて政争に巻き込まれることを避けるようになり、詩風も変化していく。幸い左遷された先の江州は、南に廬山、東に鄱陽湖をひかえた風光明媚な地で、ここで挫折の心を癒すうち、しだいに自然の美しさに惹かれていくようになり、廬山の風光をすっかり気に入った白楽天は、46歳の時に香炉峰下に草堂を建てる。(枕草子で「香炉峰の雪」として有名なあの”香炉峰”である)

江州には四年おり、さらに田舎の忠州に移る。ここでも、のどかで美しい春の江を散策したり、城の東の堤に樹を植えその成長を喜び、都へ帰る時には花をつけた木々たちとの別れを惜しんでいる。また、48歳頃からは仏教にも傾倒するようになる。

※40歳で母と娘を亡くしたこと、また晩年には詩を通して交流していた友人を亡くしたり、60歳の時には3歳の息子が(!?)
亡くなったことなどから、歳を重ねるごとに、より仏教に傾倒するようになる。

忠州で二年の月日を過ごし、49歳でやっと都へ呼び戻されるが、まもなく自ら地方の官を願い出て、杭州、蘇州へ移り、行政官として治水を進めるなどして業績をあげる。杭州、蘇州も風光明媚な地で、特に杭州のことをたいへん気に入り、西湖をはじめとする湖山に親しみ、自然風詠の世界へのめりこんでいく。

58歳の時に、病と称して現役を引退。75歳で世を去るまで、洛陽にあって隠居暮らしを楽しむ。また、洛陽の香山寺の和尚と世俗を離れた交わりを結び、「香山居士」と称し、満ち足りた晩年を過ごした。

●詩風の変化

白楽天の詩風は生き様と大変深く結びついており、大きく次の五つの期に分けることができる。

第一期 書生時代（29歳で進士に及第するまで）

今回演奏する Ancient prairie (原詩:賦得古原草送別)は、この時期に詠まれた。詳細は後ほど記載する。

第二期 新進官僚時代（29歳～44歳、左遷されるまで）

社会風刺の詩を多く詠む。『新樂府』五十首、『秦中吟』十首は心血を注いだ力作となった。

主君の恩寵を傘に着て贅沢三昧にふける宦官の姿と、生活に困窮する民衆の姿を対比させて描いた「輕肥」、昔、徴兵前に腕を折り今も動かないが、戦争に行った者はみな帰ってこず、自分は生き残ることができて良かったと話す老人の話を詠った「新豊のうでを折りし翁」、粗末な着物を着た炭売りの老人が、炭の値段が下がらぬようもっと寒くなれと願うなか、勅命と称して車いっばいに積んだ炭をふんだくっていく宦官の姿を詠んだ「炭を売る翁」、老年になっても官職にいすわり続ける者をそしった「致仕せず」など。

また、35歳の時に友人達と、楊貴妃ゆかりの地である仙游寺へ遊びに行った際、友人の勧めで玄宗と楊貴妃の悲恋を描いた「長恨歌」を作り、発表当時からおおいに流行した。長安の妓女(中国における遊女、または芸妓)たちは「長恨歌」を暗唱できることを一つの売り物としていたという。その流行は日本にも伝わり、源氏物語では構想や表現の面で深い文学的影響を与えた。

第三期 草堂閑適時代（44歳～49歳、江州、忠州の地方にて自然に親しむ）

左遷された先の美しい自然に心を癒され、四季や動植物などの自然を詠んだ詩が多くなる。

前述のとおり、香炉峰下に草堂を建て、昼まで寝たが起きるのが面倒くさい、布団にくるまってぬくぬくしながら寺の鐘を聞いた、香炉峰の雪は簾をはねあげて布団の中から見た…などとつづっている。

個人的に、高校生の頃、枕草子で「雪のいと高う降りたるを…」(定子が「香炉峰の雪はいかならむ」と聞くと、清少納言が御簾を高くあげさせた。その様子を見た定子が笑ったという有名なエピソード)を習った際、原詩はどんなに高尚な詩だろうか…と想像を巡らせていたが、予想外の詩で非常に驚いた。(ちょっとイメージが…)

ただ、当時の平安貴族の間では、白楽天の詩が教養とされ、皆目を通していたことが良くわかる。

美しい自然を描く中で、「心身ともに安らかなら、どこだって故郷だ」や「ここで余生を送るのも悪くない」と達観したようにうそぶく一面も。左遷された現状に満足できないといった姿も垣間見ることができる。

舟の上で琵琶を奏でる元長安の妓女を詠った長編叙事詩「琵琶行」も、この頃(45歳の頃)の作品で、『源氏物語』の明石の巻に引用されていることから、平安貴族たちの間で常識とされていたことがわかる。

第四期 円熟時代（49歳～58歳、杭州、蘇州の長官をし、文集を編纂して、官僚・詩人としての仕上げをする）

白楽天は特に、杭州の美しい自然をたいへん気に入り、「杭州を離れられないのは、半分は西湖のせいだ」と絶賛している。松の緑を身に纏った山、鏡のようにどこまでも平らな湖、月は一粒の真珠のように湖水の中心に影を落とす…と、絵画のような美しい詩、「春 湖上に題す」を詠んでいる。

第五期 洛陽隠居時代（58歳～75歳、洛陽にて晩年を楽しむ）

58歳で引退した白楽天は、洛陽にて隠居生活を楽しむ。朝酒を楽しんだ詩や何気ない日常を描いた詩、昔を懐かしむ詩など。「春風」の詩前半で、梅や桃、梨など宮中に咲きほこる花々、その下でわが世の春を謳歌する貴族たちを描く。若き日の白楽天なら、後半部に風刺的な表現が続くところだが、この詩では” 田舎でも健気な花たちが開かれ、村人は俺が春を喜んでいる”と締めくくっている。

● Ancient prairie (原詩:賦得古原草送別) について

白樂天が16歳の時の作。送別の宴の席上で作ったものである。

白樂天はこの詩をたずさえ、初めて唐の都長安に上京し、当時の大詩人であった顧況に面会した。顧況は白樂天の名の「居易」を見てからかい、「長安 米貴し、居 大いに易からず」といったが、作品に目を通すと絶賛し、これが出世作となって、以後白樂天の名声は一挙に高まった。

● Ancient prairie (原詩:賦得古原草送別) ~解説~

賦得古原草送別 古原の草を賦し得たり 送別

離離原上草	離離たり 原上の草
一歳一枯榮	一歳に一たび枯榮す
野火燒不盡	野火焼けども尽きず
春風吹又生	春風吹いて又た生ず
遠芳侵古道	遠芳 古道を侵し
晴翠接荒城	晴翠 荒城に接す
又送王孫去	又た王孫の去るを送れば
萋萋滿別情	萋萋として別情満つ

生い茂る古原の草、それは一年に一度、枯れてはまた栄える。
枯れた草を野火が焼いても、根までは焼き尽くされず、春風が吹けばまた芽吹く。
やがて遠くまで伸びひろがる草は、人の通らない古道をおおい、
晴れた日に輝く緑の草原は、荒れて寂しい城壁へと続いてゆく。
今日もまた親しい友を見送ることとなり、別れの悲しみは生い茂る草のように、
わが胸にわきおこって尽きることがない。

The prairie overflows with the grass' s rolling billows,
As the year comes and goes, it withers and grows.
The wild fire can never burn it out of view,
When the vernal breeze arises, it appears anew.
Its balmy odors drifts across the path time-worn,
Its luster of green extends to the town forlorn.
Again as I see my friend along the road depart,
I feel the grass is deep in sorrow as my heart.

(用語解説)

- ・離離：草が盛んに茂るさま
- ・一歳：一年
- ・遠芳：遠くまで広がる植物の香り、春になって繁茂する草木を嗅覚で表す
- ・晴翠：陽光に輝く植物の緑色
- ・萋萋：草木が茂るさま

(解説)

この詩は前述の通り、白樂天が16歳の時の作で、送別会の余興にて「古原の草」という題を与えられて作ったものである。草を題材にしつつ、親しい人を送る情を詠っている。

最後の二行は、白樂天よりもかなり昔(紀元前)に書かれた『楚辞』からの引用。「王孫遊んで帰らず、春草萋萋として生ず」(旅に出た貴公子は帰ってくることなく、春の草のみが盛んに生い茂っている)から取っており、それをふまえ、「旅に出る君を送る時草が盛んに生い茂っているのを見て、再び会える日がいつになるのかと惜別の情で心がいっぱいになる」ということを表現している。(枯れても焼かれてもまた芽吹く雑草の生命力、そこに、別れてもまたきっと会えるという希望を託しているようにも感じられる)

曲の中でも、詩の最後の二行にサビが来ており、同じメロディで二度繰り返されて聞き手にも強い印象を与えている。
また、初めの六行(古原の風景を表現する部分)では、合唱と同じ旋律で途中ヴァイオリンのソロが当てられている。

個人的に、このヴァイオリンの音色は、どこまでも続く草原、広く晴れわたっているのにどこか悲しげな空、その間を吹き抜ける
まだ少し冷たさの残る春風……そんな風景を思い浮かべます。

皆さんはどのような景色が浮かびますか?どのような香りを感じますか?

以上

参考 : 石川忠久『漢詩をよむ 白楽天100選』(NHK 出版)

ウィキペディア(Wikipedia)「白居易」のページ (<https://ja.wikipedia.org/wiki/白居易>)

※ご興味のある方は、本の貸出しも致しますので、(めっちゃ書込みしていて汚いですが…)

お気軽に畑田までおっしゃってください。